



通信員会

21世紀に生きる 子ども達へ

大久保 フヨ

一、自然なくして、人間は育たない
「自然は、すべての師」この言葉は小学校の教師より聞いた言葉です。初めて聞いた時はなんのこともか気にもしていなかった言葉です。が、振り返って考えてみると、この言葉は、私にとっては、普段は別に気にしていないが、なければ生きられない空気のような、とても大切なものだったのです。特に「自然と子どもは同じ」という思いで自然保護運動を始めてからは、この「自然は、すべての師」という言葉は、なくてはならない存在になったのです。一人の教師が教えてくれた言葉が、一人の人間の一生を支える言葉になるということもあるのです。と考えると、教師とはすばらしい仕事なのです。子どもと共に夢を語り、育てる仕事なのです。でも、残念ながら、今、このような教師が存在するのだろうか

疑問です。人間として最も大切な「生きる」という事に関しては、まったくと言っていいくらい、教育の観点からはずさんであるように思われます。そんな教育だから、校内暴力、登校拒否、いじめによる自殺などが後を絶たないのだと思います。学校は、子どもにとって楽しい場所なのです。家で面白い事があっても、学校に来るとそんな不快な思いは消え失せるのです。学校が楽しいと言ふことは、授業が楽しいということですが、学校は、雑木林のようではないといけないと思います。雑木林は、多種多様な樹木が生育し、そこにはまた、多種多様な生物が生育して、とても豊かな生態系を保っているのです。少くとも、私が子どもの頃の学校は、いろんな子どもがいて、みんなが各々を認め合って、助け合って生きていく、豊かな、雑木林のような学校であったと思います。子どもは、各々に個性があり、同じではないのです。同じようにしようとするのが無理なのです。でも、今の学校教育は、私の子どもの頃とは違ふようです。平等という間違った考え方により、子どもは不幸になっているのです。みんなと同じことが良いことであって、少しでもみんなと違ふ考え、違ふことをするといじめられたりするのです。子どもにとって

は不幸な時代です。今は、雑木林は悪いもので、みんな同じ単一種を植えられた林のような状態の学校なのです。育ちの悪い木は除外されるのです。見かけは良いですが、それは貧弱な林にすぎません。そこには、子どもひとりひとりの個性など認め合うことなどあり得ないのです。こんな状態の中で、子どもが豊かに育つわけがありません。学校が、子どもにとって楽しい場所、夢を語り合ふ、育てる場所であれば、子どもたちはいじめなど考えません。登校拒否も、もちろん校内暴力もです。今、教育改革が考えられています。私から言わせてもらえば、子どもの現実から程遠いものです。子どもの心の叫びを無視したものです。否、子どもの心の叫びが届かないのでは？と思います。学校は知識だけを教える所ではありません。生きる術を教える所でもあるのです。今の学校教育は、一番大切な「生きる」術を教えることを忘れているのです。今、考えられている教育改革では、学校は変わらないのです。

二、子どもは、自然の中でこそ育つ
私の生まれは釧路です。城山小学校、東中学校（後に教育大に）、江南高校（後に移転）と三つの学校がすぐ近くにあり、学校の近くには、

お供山と呼んでいたアイヌの砦や小川があったのです。学校が終わるとみんなでお供山に行つて遊び、小川で、どじょうやザリガニやとんぎょうなどを捕えて遊んだものです。中学生や高校生になると、ちょっと汽車に乗つて遠出。塘路湖などへ行つて遊んだものです。今、考えると私たちは釧路湿原で遊んでいたものです。雄大な自然の中で遊んでいたのです。そんな中で育ってきたからこそ、今こうして自然の大切さを訴えて、自然保護運動ができるのだと思います。人間は自然に保護されて生きているのに、それを忘れている人間があまりにも多すぎます。自然をないがしろにして、感性豊かな子どもは育ちません。私の住む北広島西の里には、私が名づけた「西の里原始林」が団地のすぐ近くにあります。この林には、私が調べただけで野の花が八十五種、シダ類、樹木など合わせると百種類以上の植物があります。地域の緑と自然を大切に守ろうと「西の里原始林と緑を守る会」を一九八七年に作り、地域の人々と保護に努めています。十月で丁度十周年になります。自然保護運動を始めた時、長男にどう思ふか聞いた事があります。長男は「自分たちが子どもの時、遊んだ場所はいつまでもそこにあってほしい。クワガタの住む林、サンショ

ウオが住む所は、大人になってもそのままであつてほしい……。」と。私は、長男の言葉に大いに励まされたものです。長男はまた、「森に入つて、古い大きな樹に会つと、なんとも言われぬ、おそれおおい……そんな思いになる」とも言います。その気持つて、とても大切なものではないかと思ひます。子どもの頃より、自然の中で育つと、自然に対して謙虚な態度で接することができ、おごつた思いは育たないと思ひます。自然は、真の意味の平等、勇氣、希望、愛などを教えてくれるのです。

三、子どもは、本来、すばらしいのだ

二人の子どもを育て、多くの障害をもつた子どもたちと過ごしてきた実感は、「子どもは、本来、すばらしいのだ。子どもは、本来、立派なのだ。子どもは、本来、美しいのだ。」といふことです。障害があるうがなかるうが、子どもは本来すばらしいのです。そして、そのすばらしい子どもたちは、豊かな自然の中でこそ感性豊かに育つのです。自然をないがしろにして、子どもは育ちません。

私は幼い時に、母を病気でくしくし、母の愛を知らずに育っています。しかし、私は自然の恵みを身体いっぱい

いに受けて、育ってきたのではないかと思ひます。勉強ができなくても平気。勉強より大事なものを自然からいっぱい受けてきたような気がします。困難に耐える力、困難に立ち向う力、弱い者を愛する力、こんな力が、災いを福に変えていく生き方に育っているのかも知れません。

子どもは、本来、すばらしいのだ。

子どもは、本来、立派なのだ。

子どもは、本来、美しいのだ。

親や大人は、子どもが本来もっている、すばらしい芽、立派な芽、美しい芽を引き出し、のばす手助けをすれば良いのです。その手助けが、教育の仕事なのです。人間性豊かな子どもを育てるためには、子どもをとりまく、周囲の人（親、教師、その他の大人）の意識を改めなければなりません。二十一世紀を生きる子どもたちに、自然に恵まれた豊かな大地を残してやりたいものです。その大地で感性豊かに育つてほしいと切に望みます。

